【特集】佐藤駿著『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』

フッサールと〈哲学者たちの楽園〉

『フッサールにおける超越論的現象学と世界経験の哲学』第四章に寄せて

植村玄輝

はじめに

デイヴィド・ルイスはかつて、「集合の領域が数学者たちにとってそうであるのと同じように、論理空間は哲学者たちにとっての楽園だ」（Lewis 1986, 4）と述べた。誤解を恐れずに言ってしまえば、佐藤駿『フッサールの超越論的現象学と世界経験の哲学――『論理学研究』から『イデーンⅠ』まで』（東北大学出版会、二〇一五年。以下、「本書」。本書からの引用・参照に際してはページ番号だけを付す）の魅力のひとつは、超越論的現象学の創始者フッサールをルイス的な〈哲学者たちの楽園〉の探索者として描き出した点にある。佐藤によれば、（A）フッサールの超越論的観念論は、ありとあらゆる可能なものの総体――これは「志向的空間」と呼ばれ、ウィトゲンシュタインが『論理哲学論考』で導入した論理空間との関連も示唆される（一九六―一九七頁、註（四））――における現実的なものの位置づけに関する主張なのである。また佐藤は、志向的空間を現象学に固有の探求の場として確保することによって、（B）フッサールに好意的な解釈者のあいだでさえもすこぶる評判の悪い「世界無化」をめぐる議論にも穏当な解釈を与えている。

本稿で私は、（A）超越論的観念論と（B）世界無化という二つの相互に関連するトピックについての本書第四章での議論を、志向的空間という道具立てがそこでどのように用いられているのかという観点からそれぞれ吟味したい。これをつうじて本書で描かれたフッサール像に見られる歪みを浮き彫りにすることが、本稿全体の目的だ。ただしこの歪みは、佐藤のフッサールと実際のフッサール（だと私が考える哲学者）とのあいだに生じたものではない。それはむしろ、本書で扱われる『論理学研究』から『イデーンⅠ』までの時期のフッサール自身（だと私が考える哲学者）の考察の不備に由来する歪みだ。したがって、佐藤がこの歪みを持ったフッサール像を提出してしまったことは、本書のフッサール解釈の正確さを示す証拠だと私は考えている。そのため以下の考察の大部分は、基本的には本書に対する同意と賛辞の言葉として受け取ることができるし、そうしてほしい。批判的な観点から問題視したいのは、佐藤が――私の見立てでは、この時期のフッサールとともに――〈可能性〉と〈単なる可能性〉をきちんと峻別しないで考察を進めてしまったことによって、せっかくフッサールからきちんと写しとった歪みを最終的には見落としてしまっているという点だけだ。

本稿の構成は以下の通りである。第1節では、佐藤による志向的空間の規定をごく簡単に辿り直す。第2節と第3節では（A）と（B）の論点がそれぞれ吟味され、佐藤のフッサール像が持つ歪みが指摘される。

1．志向的空間とは何か

佐藤による志向的空間の規定の出発点となるのは、『論理学研究』刊行後のフッサールが現象学的分析の対象を、個別の一回的な体験ではなく意識の持つ類型的本質とみなしていたという事実だ（一五八―一六〇頁）。現象学者は自分の体験をただ一度かぎりのものとする個体性を捨象し、それが例化するさまざまな類型的―本質的特徴を明

らかにするのである。こうした考察の水準においては、現象学的分析の出発点となる体験の個別例は、「私がその顕在性において現にそれを生きているような体験である必要はない」（一六〇頁）。ある体験が意識の類型的本質に即して可能であるかを明らかにするためには、その体験を実際に生きているかのような擬似的な体験で十分なのである。たとえば、太陽ほどの大きさのダイヤモンドを知覚することは知覚体験の類型的本質からして可能であるが、このことは、太陽ほどの大きさのダイヤモンドを知覚しなくても、そうした知覚の想像によって現象学的に示される。

意識が本質に即して持ちうる可能な形態、あるいはより現代的な言葉遣いをすれば、形而上学的に可能な意識の形態を探求するフッサールの現象学は、意識はその志向性ゆえになんらかの対象へと向けられているという現象学のよりいっそう根本的な発想と手を取りあうことによって、〈可能な意識とその対象のすべてを包括した領分〉という固有の探求の場を確保することになる。この領分こそ、佐藤が「志向的空間」と呼ぶものに他ならない。

> こうして明らかになるのは、現象学固有の領域が、（場合によっては現実的であるような）純粋に可能な意識作用の全体からなるということである。その各々が志向的であるような可能な意識から構成される全体を、仮に「志向的空間」と呼ぶことにしよう。それは可能な意識の総体であるが、第二章および第三章において見てきたところを踏まえて言うならば、やはり同時に、それら作用と相関的に意識されうる可能な志向的対象性からなる全体でもある。つまり志向的空間は意識作用（ノエシス）と意識対象（ノエマ）という、いわば二つのアスペクトを持っている。（一六〇―一六一頁）

現実に存在する対象も、現実には存在しないが存在することが可能な対象も、それらについてのなんらかの意識作用が可能であるかぎりで、志向的空間の中に含まれているのである。[1]

2. 超越論的観念論

本書における志向的空間の規定は、本質学としての現象学や意識の志向性といったフッサールの基本的な主張にもとづいており、解釈のための装置としてひとまずの妥当性を備えているといえる。では、志向的空間は、フッサールの超越論的観念論をめぐる本書の議論の中で具体的にどういう役割を果たしているのか。

佐藤はフッサールの観念論的主張を志向的空間によって定式化する際に、二つの観念論の区別を導入する。

> （W）いかなる現実的対象も志向的空間に属する。言い換えれば、いかなる現実的対象も、ある可能な意識の対象である。（一六二―一六三頁）
>
> （S）いかなる現実的対象も、ある特定の顕在的かつ現実的意識の対象として、あるいはそれによって動機づけられた可能性として志向的空間に属する。（一七六頁）

（W）＝弱い観念論と（S）＝強い観念論がそれぞれそのように呼ばれるのは、（S）が（W）を含意するのに対して、その逆は成り立たないためである（一七七頁）。以下では、（W）と（S）をフッサールに帰す佐藤の解釈を、彼の議論を再構成しながら検討しよう。これによって、志向的空間の導入がフッサールの志向の歩みに根ざしたも

のであることがよりはっきりするだろう。しかしそれと同時に、本書のフッサール像には歪みがあり、それに佐藤がはっきりと気づいていないということも明らかになるはずだ。なお以下では、本書の方針にならって（一五七頁）、話題を実在的（real）な対象、つまり時空的で因果的な対象に関する観念論的主張に限定する。

2・1 弱い観念論

佐藤も適切に指摘するように（一六四頁）、弱い観念論（W）――あるいは少なくとも、それとの親和性が高い発想――を、フッサールはすでに『論理学研究』のなかで、次のようにはっきりと表明している。「知覚されうる、直観されうる、意味されうる、認識されうるということに対する相関関係を存在一般の意味から切り離すことは不可能である」（XIX/2, 730）[2]。この発想は、「原理的に言っていわば知覚可能ではないような存在（Sein）はナンセンスである」（Mat III, 136）という一九〇二／〇三年の『一般認識論』講義での主張へと結実する。参照を簡単にするために、存在と知覚可能性に関するこの主張を定式化しておこう（「EP」は「Existence and Perceivability」の略）。

（EP）何かが現実に存在するのは、それが知覚可能であるときに限られる。

すでに確認した志向的空間の規定を踏まえるならば、（EP）は（W）を帰結として持つ。（EP）が述べるように、現実に存在するどんなものについても、それについての知覚体験が可能であるならば、そうした知覚体験は志向的空間に属することになる。志向的空間はそこに属する体験の志向的対象も含むのだから、このとき現実的な対象はどれも、志向的空間のなかに組み入れられる。つまり、（W）が成り立つ。

問題は、フッサールが（EP）のように定式化される主張を正しいと考えたのはなぜかという点だ。佐藤は、この主張を導入するに先立って、（W）を「現実に存在するものは可能な認識の対象として存在する」という主張に言い換えた上で、それについて「本来それほど大胆な主張であるようには思えない」と述べる（一六三頁）。しかし、（W）の根拠がもっぱら（EP）に求められるのだとしたら、つまり、何かを認識する可能性がその何かを知覚する可能性によって保証されるのだとすれば、私には、それはなかなか大胆な主張にみえる。クオークのような理論的対象は、フッサール的ないみで実在的対象である一方で、私たちに知覚可能ではない。というよりも、知覚によって直接観察できないことは、何かが理論的対象であることの基準のひとつだ。すると（EP）からは、理論的対象は存在しないという立場が帰結するように思われる。これは誰もが認める立場ではないし、仮にこの立場が正しいのだとしても、それが（EP）から一挙に導かれるほど簡単に擁護できるようなものではないことはたしかだ。したがって、（EP）にはどこかおかしなところがないだろうか。

こうした疑念から（EP）を守るためには、そこに登場する知覚可能性が及ぶとされる範囲を確認する必要がある。佐藤も指摘するように、「ここで述べられていることの実質は、存在を要求しうるいかなる対象についても、その対象を志向する作用には、本質上（スペキエス的に）その作用の内容と同一であるような内容を持つ直観的作用〔＝知覚〕が対応しなければならないということ」（一六五頁）なのである。つまり、何かが存在するための必要条件として（EP）が求めているのは、その何かを知覚することが意識の本質にしたがえば可能であるということであって、私たち人間にとって可能であるということではない。こうして、人間にとっては知覚不可能な理論的対象についてさえも、それが（EP）を満たすという主張に余地が与えられる。（EP）は、理論的対象が現実に存在するという主張とも両立するのだ。[3] またこれによって（EP）は、人間がこの世界に登場するはるか前の世界

について語ることも許容しうることになる。こうしてフッサールが探求する可能な意識の総体は、可能世界の総体をその相関者としてもつところまで広範囲に及ぶものとみなされる。こうした発想は、超越論的観念論に関する初期の草稿群（一九〇八年）から『デカルト的省察』（仏語版一九三一年）にいたるまで、フッサールのテクストにはっきりと見てとることができる。

> われわれがある事実的な意識を変化させるならば、つまり、それを単なる論理的可能性という枠の中で任意に変化させるならば、われわれはいわば無制限の可能性の中を動くことになる。〔意識の〕対象の側から述べれば、この世界と同様に、無限に多くの他の諸世界（Welten）も可能なのである〔…〕。（XXXVI, 53）

> 真なる存在の全体を、可能な意識、可能な認識、可能な明証、これらからなる全体（Universum）の外部にあるものとして捉え、両者をまったく外的に硬直した法則によって互いに結びつけようとするのは、まったくの無意味（unsinnig）である。両者は本質的に互いに連関しており、本質的に連関しているものはまた具体的にも一つであり、超越論的主観性という唯一の絶対的でありながら具体的なものにおいて、一つとなっている。超越論的主観性が可能な意味からなる全体であるとすれば、その外部というのはまさに無意味（Unsinn）である。（CM, 86［本書の一九九頁註（一二）から引用］）

志向的空間を論理空間になぞらえる佐藤の解釈は、こうした事情をうまく捉えているといってよい。

こうして意識の本質的可能性が人間にとっての可能性から区別されるという点を踏まえるならば、（W）を

（EP）に根ざす主張としてフッサールに帰する佐藤の解釈がしっかりとしたテクスト上の根拠をもつことはたしかだ。[4] では、（W）よりも強い観念論的主張（S）についてはどうだろうか。

2・2　強い観念論

強い観念論（S）がフッサール自身の主張を適切に定式化したものであるということも、本書の該当箇所で引用されるテクストに照らし合わせれば、十分に明らかであるように思われる。したがって佐藤の議論を繰り返すことはしない。私がここで問題にしたいのは、（S）の文献上の根拠ではなく、フッサールがなぜ（S）を必要としたのかについての佐藤の説明だ。この説明は、およそ次のように再構成できる。

（1）（W）が示すのは、現実的対象はどれも、それが理念的に（つまり本質的に）可能な認識（＝知覚によって充実された判断作用）の対象であるかぎりで志向的空間に属するということだ（一六五―一六七頁）。

（2）しかし（W）は、〈何かが可能であるだけでなく現実的でもあるとはどういうことか〉について何も教えてくれない（一六七―一六八頁）。

（3）なぜなら、ある対象の認識の理念的可能性は、その対象についての判断が想像によって充実可能であることによって示されるため、ある対象が想像可能であることは、その対象が現実的であることを意味しないからだ（一七〇―一七一頁）。

（4）何かが現実的（wirklich）であるとはどういうことか〉を明らかにするためには、顕在的（aktuell）な充実化（つまり、顕在的な認識）に訴える必要がある（一七一頁）。

（5）とはいえ、顕在的に、つまり私の意識のうちで顕在的に充実されている志向は、現実的なもののわずかな一部しか対象としていない（一七二頁）。

（6）それにもかかわらず、私は、顕在的には知覚的に充実されていない志向の対象についても独特の確実性を持つ。これは、そうした志向の充実が、私の顕在的な意識によって「動機づけられた」可能性（レアールな可能性）に属するからだ（一七二―一七六頁）。

（7）志向が顕在的に充実されていることをレアールな可能性のうちに含めるならば、現実に存在する物的対象は、それについての知覚がレアールに可能なものと外延が等しくなる。レアールな可能性は、意識の可能性であるのだから、志向的空間に属するための条件を満たしている。よって（S）が成り立つ。

以上のように再構成できる説明の大きな筋書き――何が現実的なのかという問題について（W）は何も教えてくれず、そこで（S）が要請される――に、私は概ね同意する。しかし私の見るところでは、（W）が現実性について何も教えてくれないということの理由を、（3）のように説明することには問題がある。

2・3　佐藤の議論の問題点

これがどのような問題なのかをきちんと指摘するためには、可能なものの総体――つまり志向的空間――について考察する二つの観点を区別する必要がある。私の見立てでは、佐藤の叙述はこの二つの観点を峻別しきれていないことによって、そこで描かれたフッサール像に歪みをもたらしている。

志向的空間に対する第一の観点は、この空間をあらかじめ〈あらゆる可能性からなる固定された全体〉として捉

えるものだ。たとえば、フッサール自身の発言を引きつつ次のように述べるとき、佐藤はこの観点に立っている。

〔…〕「『現実的世界』と呼ばれる我々の事実的経験の相関者、それは、多種多様な諸々の可能世界および非世界（Unwelt）の特種事例であ」って、この世界〔＝諸々の可能世界および非世界[5]〕は、現象学的に見れば「多かれ少なかれ秩序づけられた経験連関を伴う『経験意識（erfahrendes Bewußtsein）』という理念がとる本質上可能な変遷態の相関者にほかならない」（III/1, 100）わけである。一般に「可能な」世界とは、志向的空間に属する多様な意識から任意に構成可能な調和的・整合的な意識体系の全体的・対象的相関者であると言ってよい。（一七八頁）

志向的空間に含まれる可能世界（および非世界）は無数にあり、そもそも現実世界についてさえも知らないことだらけの私たちは、それらの可能世界がひとつひとつどのような世界であるのかについて、とうぜんほとんどなにも知らないし、知ることができない。したがって私たちは、志向的空間を作り上げる可能な意識とその志向的相関者のほとんどについて、現象学的な記述を持たない。そうであるにもかかわらず、私たちは志向的空間の全体について語ることができる。右の引用中で、佐藤はフッサールとともに、私たちが住む現実世界が志向的空間のなかに含まれると語っている。これと同様の仕方で、私たちは志向的空間について、たとえば、そこに含まれるどんな世界にも物的な対象が少なくともひとつ存在する、と語ることができる。私たちは、ある総体に含まれるもののそれぞれについて知らなくても、その総体について語ることができるのである。こうした語り方を志向的空間についてする際に現象学者が立つのが、第一の観点である。この観点からは、志向的空間に含まれるすべての可能世界は、ま

さに志向的空間に含まれているものとして一様に扱われる。

それに対して、志向的空間に対する第二の観点は、事実として成り立っている私の顕在的な意識を中心にしてこの空間を考察するときの観点だ。この観点からの議論は、可能な意識作用とその志向的相関者の特徴の個別的な現象学的記述を、顕在的な意識を出発点として積み重ねることで、志向的空間をいわばひとつずつ塗りつぶしていく。右の（4）から（7）に該当する箇所では、佐藤はもっぱらこの観点から意識のレアールな可能性について論じているように見える。というのも、（6）にもあるように、そこでは〈顕在的な意識を持つ私が、顕在的に知覚されていないものについての独自の確実性をもって意識しているのはいかにしてか〉という問いが扱われるからだ。レアールに可能な知覚体験は、顕在的な意識から出発し、そうした意識によって動機づけられた可能性として、志向的空間の中に塗り込まれるのである。したがって強い観念論（S）は、その根拠を第二の観点の中に持つ。

ここで注意すべき点がひとつある。いましがた第二の観点に与えた特徴づけそれ自体は、志向的空間の全体を段階的に塗りつぶされるための空間として一様に捉えているかぎりで、第一の観点にも依存している。このようないわば不純な特徴づけを採用せざるをえないのは、第一の観点を排し、第二の観点をその内部だけから適切に特徴づけることに、原理的な困難があるからだ。すでに述べたように、有限の存在者である私たちには、間違いなく無限の広さを持つ志向的空間の全体を第二の観点から記述し尽くすことができない（そしてこうした事情を述べるためにも、第一の観点が必要になる）。そのため、もし現象学的な主張の根拠を第二の観点から得られるリソースだけに限ったとすれば、そこに立ちつつ現象学者が論じているものを「志向的空間」と呼ぶことさえも越権行為になってしまう。別の言い方をすれば、第二の観点からなされた志向的空間の現象学的考察について語るとき、私たちは実際にはこの観点と第一の観点を行き来しているのである。したがって、強い観念論（S）は、その根拠を第二の

観点の中に持つにもかかわらず、それを定式化するためには、第一の観点が欠かせないことになる。

さて、私が（3）として再構成した箇所で、佐藤は次のように述べている。

［1］事物の現実性、実在的現実性が問題となるところで想像に訴えることは何の意味も持たない。想像が我々に理解させてくれるのは、そこにおいて想像されているものが可能であるということであるが、それが現実的であるということではない。［2］志向的空間のうちには様々な意味作用が属すると同時に、その意味作用を充実化するような可能な直観作用も含まれるが、［3］意味作用と直観作用とのこうした可能な充実化、すなわち想像が保証するような知覚可能性、本質的な充実可能性を考えても、その充実化によって与えられると想定される同一的対象が直ちに現実的になる、つまり存在するようになるわけではないのである。（一七〇―一七一頁、強調および角括弧内の番号は引用者による）

ここで佐藤は、［1］現実的対象の現実性はその対象の想像可能性によっては保証されないということを説明するために、［2］志向的空間の全体を捉える第一の観点から、そこに含まれる可能な意味作用とそれを充実する直観作用をとりあげ、［3］それらの直観作用を一様に、想像可能性によって志向的空間に属するものとみなしている。したがって（書き方が曖昧なので断定はできないが）おそらく、佐藤はここで、想像可能性によって志向的空間に数え入れられる直観作用のうちに、現実に存在する対象を相関者として持つものも含めている。そうでなければ、想像された「同一的対象が直ちに現実的になる〔…〕わけではない」という言い方はここでされないだろう。この言い方は、想像された対象と同一の対象が現実的でもあるというケースを認めないかぎり意味をなさないから

だ。

だが、フッサールが遅くとも一九一一年三月の草稿（XXVI, Beilage XIX）で到達し、本書の第三章でも丁寧に論じられた洞察を深刻に受け止めるならば、そうしたケースを認めることはできない。フッサールがこの草稿で論じたように、「経験的な直観〔＝現実に存在する物的対象の知覚〕を単なる想像へと変化させること（Umwandlung）は、対象の同一性の保持を損ねるのである」（XXVI, 209）[6]。すると、現実に存在する事物は、黄金の山のように単に想像することしかできない対象が志向的空間に属するのとまったく同じ仕方でこの空間に属するわけではないことになる。一九一一年のフッサールが得た洞察とともに（S）を認めた時点で（一七〇頁）、（W）に登場する可能な意識を単なる想像の可能性によって一様に説明するという選択肢は佐藤には残されていないのである。それにもかかわらず、佐藤は想像可能性にもとづく一様な説明を（W）に登場する可能な意識にあたえている。ここに、佐藤が描いたフッサール像の歪みがある。

佐藤が直面するこうした困った状況の原因は、本来ならば第二の観点から得られるリソースにもとづいて示されるべきことを問題にする場面で、第一の観点からの考察に不必要に引きずられてしまっている点にあるように見える。フッサールの超越論的観念論の枠組みの中では、何が現実に存在するかという問題は、知覚することがレアールに可能なものは何かという問題として取り組まれる。レアールな可能性は顕在的な知覚経験によってその範囲が定まるのだから、何がレアールに知覚可能かということは、第二の観点に立つことによってのみ答えることができる問題だ。しかしその一方で、レアールな可能性を志向的空間のなかに位置づけ、（S）が成り立つと述べるためには、現実に存在する事物も現実には存在しないが存在することが可能な事物も、志向的空間に含まれる可能な対象として一様に扱う第一の観点が欠かせない。ところで、第一の観点から見られたあらゆる対象が持つ一様性は、

それらの対象に相関する意識の一様性を伴っている。佐藤も指摘するように、志向的空間に属するどんな対象にも、それを対象とする可能な意味志向が割り当てられるのである。[7] おそらく佐藤は、少なくとも（3）として再構成した箇所で、この一様性を〈志向的空間に含まれる可能な意味作用のどれもが同じ仕方で充実可能である〉という一様性を導くものとして理解してしまっているのではないだろうか。

少し別の角度から考えてみよう。現実的な対象も現実に存在しない対象も、それに対応する可能な意味作用が志向的空間のなかにあるといういみでは、第一の観点から等しく可能なものとして扱うことができる。またそのかぎりで、現実的なものは可能なものの一例である。だが、ここで問題になっている可能性は、単なる想像の可能性によって境界確定される可能性と重なり合うわけではない。現実的なものを単に想像する可能性を否定するフッサールにとって、後者は前者から現実的なものを差し引いたあとに残る、単なる可能性なのである。そして、第一の観点から一様に捉えられた可能な対象のどれが単に可能な対象であるのかということは、それらの対象のどれが現実的なのかということと同様に、第二の観点に立つことによってのみ論じうる事柄である。第一の観点と第二の観点を佐藤が峻別できていないことの源泉は、おそらく、前者と関連する可能性を単なる可能性と混同していることにある。

可能性と単なる可能性を混同しているのではないかという疑念は、佐藤だけでなく本書で論じられる時期のフッサール自身にも向けられるべきものだ。『イデーンⅠ』でフッサールは、「『可能な事柄（Möglichkeiten）』の認識が現実の事柄（Wirklichkeiten）の認識に先行するという古い存在論の教説」（III/1, 178）について肯定的に語り、現実性の問題を形相的（つまり理念的）可能性に関する問題の後に置く（cf. III/1, 337-8）。こうした発言を素直に受け止めるかぎり、現実的なものをその一例としてもつ可能性は、単なる想像を源泉とする形相的な認識によって

得られる単なる可能性として理解するしかない。したがって、佐藤が描いたフッサール像の歪みは、かなりの程度フッサールに由来するといっていいだろう。

すでに指摘したように、志向的空間に対する第一の観点と第二を峻別する必要がある一方で、後者にもとづく考察には前者が欠かせない。そのかぎりで、第一の観点からから得られる志向的空間の全体に関する知見は、それが別の観点から持ち込まれたものであることを踏まえるならば、第二の観点からの探究でも一定の役割を果たすのである。次の節では、これらの点を本書に即してはっきりさせるために、「世界無化の思考実験」に関する同書の見解と、そこにも表出しているように見える佐藤のフッサール像の歪みに着目しよう。

3. 世界無化

フッサールの解釈者にとって、世界無化に関する『イデーンⅠ』第四九節の議論は悩みの種であり続けてきた。この節でフッサールは、世界が無化された後にも意識が残り続けるということを示そうとするのである。額面通りに受け止めるかぎり、この主張は信じがたい。そのため、超越論的現象学というプログラムに好意的な解釈者の多くは、フッサールの超越論的観念論を信じがたい立場にしないために、世界無化の考察をうまく処理するという課題を引き受けることになる。佐藤もその例外ではない。

佐藤は本書で、この悪名高い議論をおよそ次のようにまとめることができる仕方で解釈している。

（i）フッサールが『イデーンⅠ』第四九節で示そうとしているのは、実際には、世界の存在が偶然的なものであり、それは存在しなくてもよかったという主張でしかない（一七七―一七九頁）。

（ii）世界が存在しない可能性は、志向的空間のなかにいかなる調和も持たない意識の可能性が含まれることに根ざす。「〔…〕単純化して言えば、世界が存在しないという可能性は、志向的空間から任意の諸意識を取り出して、不整合な体系を作ることができる〔…〕」（一七九頁）。

（iii）世界が存在しない可能性という主張は、〈存在するものの全体としての世界〉という『イデーンⅠ』での世界の定義と、〈意識のアプリオリな本質的可能性によって張り巡らされる志向的空間〉というアイディアを受け入れるならば、不可解なものではない（一八〇―一八三頁）。

（iv）「世界無化の思考実験」には、ある懐疑論的想定がそれによって無力化されるという眼目が認められる（一八四―一八七頁）。われわれが現に持つような（おおむね）調和的な経験をもつ限り、世界が存在しない可能性は動機づけられた可能性にならず、単に想定されるにすぎない。したがって、「われわれは（おおむね）調和的な経験を現にしているが、『本当の』世界は経験に現に与えられるものとは違って存在しないかもしれない」という懐疑論的な想定は、その動機を欠くため無力である。

世界無化に関する考察の目的が、世界が存在しなかった可能性を示すことであるという佐藤の解釈に、私は同意する。また、この考察の眼目が、ある種の懐疑論的想定を無力化する点にあるという佐藤の指摘についても、異論を挟むつもりはない[8]。ここで私が問題にしたいのは、フッサールの議論を（ii）のように再構成することの適切さである。

佐藤は（ii）に該当する箇所で、『イデーンⅠ』第四九節の議論を、もっぱら志向的空間に対する第一の観点と関連づけている。このことは、「志向的空間から任意の諸意識を取り出して、不整合な体系を作る」という発想の

もとで佐藤が世界無化の可能性について語っていることからも明らかだ。すると、佐藤によるフッサールの議論の再構成は、次のようなさらなる再構成を許容することになる。

（*）調和を完全に失って進行する意識（これを「世界無化シナリオ」と呼ぶ）の可能性が志向的空間に含まれ、志向的空間はわれわれの現に持っている意識のイデア的可能性に等しいのだから、世界無化シナリオはそうしたイデア的可能性として成り立つ（が、動機づけられた可能性にはならない）。

しかし、『イデーンⅠ』第四九節の実際の議論は、第一の観点だけから（*）のように再構成できるものであるようには見えない。フッサールはそこで、（a）（おおむね）調和的に進行するということは、われわれの顕在的な意識が持つ本質としては洞察されない、と主張した上で、この主張から、（b）意識が調和を完全に失った形態を持つ可能性を考えることができるという結論に至る（cf. III/1, 103）。フッサールが（a）を掲げる理由は第四九節だけを読んでもはっきりしないが、それを導く議論を、この節を含む『イデーンⅠ』の各所に明示的に登場する主張から以下のように再構成できる。

（Ⅰ）意識の本質的特徴を洞察（明証的に把握）するためにはその特徴の例を自由な想像によって直観する必要がある（cf. III/1, 69, 16）。

（Ⅱ）世界無化シナリオとは、射影の系列という意識の感覚的な側面が完全に混乱している可能性のことである（cf. III/1, 103-4）。

（Ⅲ）意識の感覚的側面に関しては、自由な想像という方法を使って探究することができない（cf. Ⅲ/1, 147）。

（Ⅳ）したがって、意識の本質的特徴が世界無化シナリオを排除するか、それとも許容するかということは、洞察的には決定できない。（おおむね）調和的に進行することが意識の本質的特徴ならば世界無化シナリオは排除されるのだから、ここから（a）が帰結する。

以上の議論の鍵となるのは前提（Ⅲ）だが、この前提はもっぱら第二の観点に立つことで保持されているように見える。フッサールが（Ⅲ）を掲げた理由についてここで立ち入ることはできないが、どのようなものであれ、そうした理由は、それに立つために意識の特定の可能性の特徴を知っておく必要のない第一の観点からは示せない。したがって、この議論をもっぱら第一の観点と関連させて描かれた佐藤のフッサール像は歪んでいる。

ただしここで第一の観点からの考察も一定の役割を果たしていることは明白だ。第二の観点からは、世界無化シナリオにおける意識の形態に関する主張である（Ⅱ）を前提として認めることができない。そればかりか、一連の議論が答えを与えようとするそもそもの問題、つまり世界の存在が偶然的であるかどうか、したがって世界が存在しない可能性もあるどうかということも、第二の観点だけを厳格に守ることによっては語ることができない。なぜならそこで問題になっているのは、可能なものの総体としての志向的空間に世界無化シナリオは含まれているのかということだからだ。

ここで決定的に重要になるのは、世界無化シナリオについてわれわれは「考えることができる（denkbar）」という、（b）に含まれる言い回しだ。意識がその本質にしたがってどういう特定の可能性を持つかということは、そうした可能性の例を想像することによってしか洞察されない。したがって、そうした洞察ないし直観を目指す第二

の観点からは、志向的空間に属する可能な意識について、われわれには語れない事柄がある。しかしフッサールのここでの発言にしたがえば、そうした事柄についても、われわれは志向的空間の全体を通覧する第一の観点から、非洞察的・非直観的に語ることができることになる。これまでに洞察的に示されたことと衝突しないかぎり、フッサールは意識のさまざまな可能性について、第一の観点から単に「考える」ことを許すのである。

フッサールが『イデーンⅠ』で以下のように述べるときに念頭にあるのは、おそらくいま論じたような事情だ。

〔…〕演繹的な理論構成は現象学から除外されている。〔もちろん〕間接的な推論は現象学のために端的に拒否されるわけではない。しかし、現象学の認識はすべて記述的で内在的な領分に純粋に適合したものであるべきなのだから、推論やありとあらゆる非直観的な議論の進め方は、そのあとで直接的な本質直観によって所与性へともたらされるべき事象に向けてわれわれを導く、という方法上の意義しか持たない。類比を思いつくことによって実際に直観するよりも前に本質連関についての予想が暗示され、そこから更に推論をすることができるようになるかもしれない。しかし最終的には、本質連関を実際に見てとることによって予想が解決されなければならない。そうしたことが成り立っていないかぎり、われわれはいかなる現象学的成果も手にしていないのである。(III/1, 157-158)

すると、第一の観点から志向的空間の全体を捉えるという方法は、それ自体では現象学的な成果ではないが、現象学的な成果になりうる仮説を提出する手段としては、現象学者にとって利益をもたらしうる。しかし、志向的空間という哲学者たちの楽園を一様に捉えて考察するこの観点に佐藤が立つ際に、その限界を自覚的にわきまえていた

かについては、残念ながら疑わしいと言わざるをえない。とはいえ、以上で指摘してきた問題の所在に気づかせるほど踏み込んだ議論を本書が展開している――少なくとも私自身は、本書を評するという機会が与えられるまで、志向的空間にたいする二つの観点をきちんと峻別していたとは言い難い――ということは、掛け値なしの賛辞とともに、最後にあらためて強調しておこう。[9]

註

(1) 佐藤はさらに、丸い四角のような不可能対象も、それについての（反意味的ではあるが）有意味な表現が可能である限りで、志向的空間に属すると主張する（一六一頁）。しかし、こうした解釈がフッサールの後期の著作を考慮した上でも成り立つかどうかについては、慎重になる必要がある（cf. Benoist 2015, 111-112）。

(2) 本書での訳文（一六四頁）を踏襲した（次の引用についても同様）。ただし佐藤はここで、参照を「XIX/1, 730」と誤記している。

(3) Hardy（2013, 167-168）は、およそ同様の理由から、（EP）として定式化される主張が理論的対象の存在を許容すると論じ、フッサールを科学的実在論者として読む解釈を提案している。

(4) 人間にとって不可能な知覚経験の本質的な可能性を認めることによって、フッサールは、理論的対象の問題とは別の難しい問題を呼び込むことになる。ある特定の非人間的な知覚経験が意識の本質的な可能性として確保されているのだとしても、それを顕在的な経験としてもつことは、私たち人間にはもちろん不可能である。また、そうした経験がどのようなものかを想像してみることさえも、人間にはきわめて難しい。フッサールはここで、現象学が扱うべき可能な経験の範囲を、それが「どういうことか（what it is like）」を語ることが私たち人間にはできない（あるいは少なくとも、そうすることがきわめて困難な）ところにまで拡大しているのである。こうした拡大が正確には何を意味し、どのように評価されるべきなのかということは、慎重に論じられるべき事柄である。しかし、この問題に立ち入ることは本稿の課題をあきらかに大幅に超える。

(5) 引用文だけを読むと「この世界」は現実世界を指しているようにみえるかもしれないが、佐藤が引くフッサールの一節はあきらかに諸々の可能世界および非世界を意味上の主語としているため、〔〕内にそれを明示した。またこの読み方は、引用文の二文目の内容ともよく整合する。また、以下では非世界の問題は特に扱わない。非世界については本書の一七八頁を参照のこと。

（6）残念ながら、フッサールがこうした主張を掲げた根拠を立ち入って検討するだけの紙幅が本稿にはない。

（7）「その特に意味作用からなる層だけを考えるなら、それ〔＝志向的空間〕はほとんど純粋な論理的可能性の空間であると言っていい。そこに属する意識は、どんなものであれ同等の権利を持って可能であろう。対象的観点から言えば〈反意味的な表現の意味作用の対象については今しばらく措くとすれば〉、いかなる対象も、それが可能でありさえすればみな同等の権利を持って存在可能である。可能性それ自体はいわば完全に平等であり、いかなる対象に対しても等しく寛容である」（一六八頁）。

（8）ただしここで退けられている懐疑的想定がどれほどのものかについては、はっきりさせておかないといけない。世界無化に関する考察をつうじてフッサールが示すことができたのは、〈私にとっていま調和的な経験が成り立っているにもかかわらず、世界はいま存在しないかもしれない〉という懐疑的想定の不合理さでしかない（したがって、マイクスナーが指摘するように、デカルトの悪霊の想定は、フッサールにとって受け入れることができないものである（cf. Meixner 2010, 181-182））。言い方を変えれば、いま調和的に成り立っている経験が次の瞬間に完全な混沌へと陥るかもしれないという懐疑的想定――これは、〈世界はじつは存在しなかったということが未来に発覚するかもしれない〉という想定に等しい――に対して、ここでのフッサールの議論は無力なままである。

（9）本稿は、二〇一五年二月二一日に東北大学川内キャンパスで開催された本書の合評会での筆者の発表にもとづく。

文献

Benoist, J. 2015. "Sense and Reference, Again." In J. Bloechi & N. de Warren (eds.) *Phenomenology in a New Key. Between Analysis and History.* Springer.

Hardy, L. 2013. *Nature's Suit. Husserl's Phenomenological Philosophy of the Physical Sciences.* Ohio University Press.

Husserl, E. 1950ff. *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelwerke.* Nijhoff/Kluwer/Springer.（巻数をローマ字で示す。）

Husserl, E. 1995. *Cartesianische Meditationen,* E. Ströker (ed.), Felix Meiner.（CMと略記する。）

Husserl, E. 2001ff. *Husserliana Materialien,* Kluwer/Springer.（Matと略記し、巻数をローマ字で示す。）

Lewis, D. 1986. *On the Plurality of Worlds.* Blackwell.

Meixner U. 2010. "Husserls transzendentaler Idealismus als Supervenienzthese. Ein interner Realismus." In M. Frank & N. Weidtmann (eds), *Husserl und die Philosophie des Geistes,* Suhrkamp.

（うえむら　げんき・立正大学／高知県立大学）